幼児の教育　第102巻　第10号　平成15年10月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

153.9.11
所蔵図書館

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003
10

第102巻　第10号　日本幼稚園協会

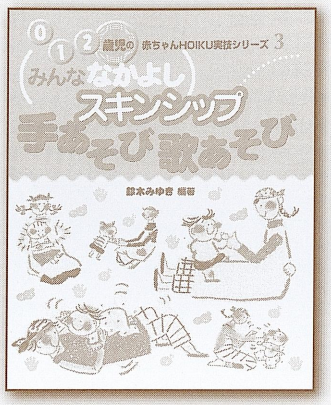
0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実技シリーズです

最新刊

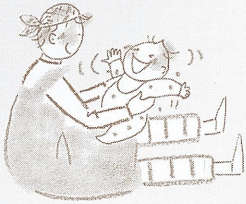
0・1・2歳児の
赤ちゃんHOIKU実技シリーズ3

みんななかよし
スキンシップ手あそび・歌あそび

乳幼児と過ごす時間にふさわしい
スキンシップな歌あそびを年齢別に紹介！



乳幼児にとって大切な安心感・安定感を与えるふれあい遊び歌をオリジナル曲、わらべうたの中から年齢別に紹介。０・１・２歳児の年齢別「遊び歌のポイント」のほか、子どもをひきこむ導入のヒントや発展のヒントなども多数掲載しています。一対一から集団まで、さまざまな遊び方にも対応。乳幼児といっしょにうたったり踊ったりして、スキンシップを楽しむためのアイデア満載の一冊です。



鈴木みゆき 編著　ＡＢ判　９６頁　本文２色刷り　定価：本体２,２００円＋税

［既刊］好評発売中！

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ1
笑顔がいっぱい　わくわく保育室　阿部　恵編著

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ2
げんきわくわく　手づくりおもちゃ・プレゼント　阿部　恵編著

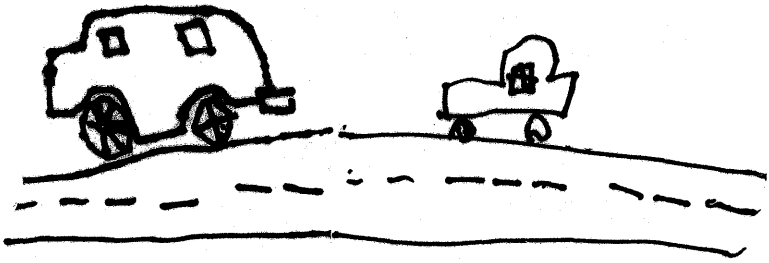
0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ4
心を伝える　おたよりアイデア　鈴木みゆき・原田留美編著

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第102巻　第10号



幼児の教育

目次

——第一〇二巻　第十号——

巻頭言　教育の陰にある教育……中沢　和子…（4）

ポジティブサポートの世界(4)
「その人らしい生き方」を目指して……村田　愛…（8）

手づくり活動の楽しさすばらしさ(7)　手づくりのコマで……浜本　昌宏…（17）

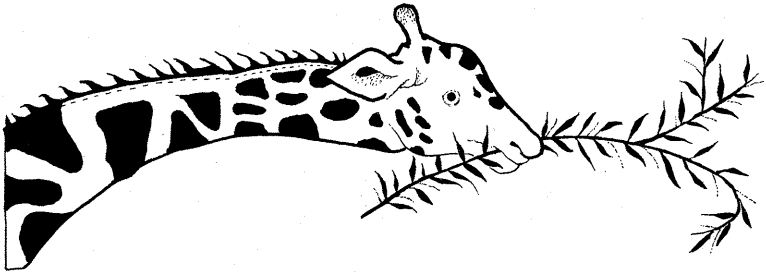
障碍をもつ幼児の保育(15)——この子と出会ったとき——
見ること　その二……津守　真・津守　房江…（18）

子どものいる風景(4)　今、子どもたちのあそび場は
——ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場(2)——……小林　美実…（24）

© 2003
日本幼稚園協会

ある日……（32）
スノーボードの遊びから……上坂元絵里…（34）
特集〈手〉
手と手、夢想……菊地　知子…（41）
手当てについて……酒井　朋子…（44）
神様からの贈り物・「手」……安西　三恵…（48）
かしこい〝手〟……永野むつみ…（51）
「手」をとおして、からだのなかに残る記憶……渡辺　満美…（57）

表紙絵／南塚　直子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・佐藤　寛子
編集部／仲　明子



巻頭言

教育の陰にある教育

中沢　和子

ゴミとゴミ捨て袋

毎年、行楽シーズンになると、行楽地に捨てられるゴミや空き缶が世間の話題になる。海開きにさきがけて、小学生達が集団で砂浜のゴミ拾いをしたり、行楽地の清掃に出たりすると、よくテレビのニュースなどで取り上げられ、子どもが差し出されたマイクに向かって、

「ゴミがたくさん捨ててあるのでびっくりしました。大人もゴミは捨てないようにして貰いたいと思います」

などと言う姿が放映されたりする。実際、行楽地でなくても、道路沿いの植え込みやちょっとした物陰などに、空き缶やスナック菓子の食べ殻が捨てられているのはよく見受けるものである。長距離電車の終点で乗客が降りたあとの座席にも、弁当などの食べ殻が残っていることが多い。

ここで私たちが思い出しておきたいのは、保育園・幼稚園、小・中学校で、遠足の時は必ずゴミ捨て袋を持たせ、空き缶や食べ殻はすべて家に持ち帰る教育を続けたきたことである。私が覚えている限りでも四〇年以上前から、園や学校で渡される遠足の注意書きには必ず所持品の中に「ゴミ捨て袋」があった。義務教育の学校では公立・私立を問わず必ずゴミ捨て袋を持たせているようだから、個人として一〇年以上、社会として五〇年近くこの教育が続けられていることになる。いま社会で生活している大人の殆ど全ての人は学校時代にゴミ捨て袋を持って遠足に行った経験があるはずなのである。

この教育は幼稚園・小・中学校の教育過程とは関係なく、まさに一貫教育として行われ続けてきた。地域差、学校差、予算など、「でも……だから駄目だ」という理由は一つも成り立たない。それなのにこれだけゴミが捨てられているのだから、この教育は不成功だったのではないだろうか。遠足の注意書きは誰からも忘れ去られ、不成功という意識も持たれていないように見える。それはいったいなぜなのだろうか。

ゴミ袋の背景

いま飲み終わったジュースの空き缶や食べ殻を野山に投げ捨てるかどうかは、ごく単純に、その人が持つ美しさへの感覚にかかっている。波打ち際に貝殻が散らばっているのはいいものだし、川に紅葉が流れるのは美しいが、紙屑や空き缶が散らばっているのは我慢できない、という感覚である。この感覚があれば、少なくとも自分が散らかすことはできないと思われる。

第二は想像力である。口を引き開けた空き缶の断面やプラスチックの破片が落ちていたら、次に来た誰かを傷つけないだろうか。また食べ殻ではないが、ナイロンの釣り糸が絡まって飛び立てない鳥や、片足を引きちぎられた鳥の姿が報道されることもある。仲間の鳥は飛び立って渡っていくのに、もがき続け、力つきて死ぬ鳥、足をちぎられてなお飛ぼうとする鳥の姿を想像できるなら、切れた釣り糸を捨てておくことはできないと思われる。思いやりとは、できる限り相手の立場に近づいて、その状況を思い浮かべる想像力の上に成り立つのである。

第三は、想像力の基礎となる確実な知識である。金属や裂けたプラスチック容器の鋭い断面が、思いがけないほど危険なこと、化学繊維が水の中でも変化せず、いつまでも原型を保っていること、人間以外の動物はからんだ糸をほどく器用な手を持っていないことなど、ごく当たり前な、しっかりした知識と、それをつなぐ思考力とを持っていな

ければ、充分に想像を巡らすことはできないし、従って思いやることもできないと思われる。知識も思考力も、優しい思いやりの心の基礎なのである。

○歳児からの生涯学習

糸がからまって飛べない鳥や、流れてくるビニール袋をクラゲと間違えて食べてしまうイルカの話などは、まだ想像しやすいかも知れない。しかし自然界は全て複雑に関係し合っているから、人間が自然の生態系を護ろうとする理念の基礎には、学校で学ぶ殆ど全ての知識が関わってくる。美しさへの感覚を育てるのはその出発点であり、まさに○歳児から始まるといってよい。ゴミ捨て袋の教育は生涯にわたる総合学習の集積なのである。

今までこれが不成功だったのは、この大きな背景を見失って、ただ習慣的に「ゴミを捨てるな」とだけ繰り返していたからではないだろうか。自分たちが休んだ跡が散らかっていてはみっともない、という程度のしつけだったかもしれない。

特に乳幼児の教育では、子どもが幼いだけに、私たちはこまごまとした世話や言葉かけの中に教育の内容の大きさを見逃しやすいものである。日常繰り返される、ごく単純に見える子ども達との生活の中にも、生涯にわたる学習の基礎となる大きな理念が隠されていることを、改めて感じたいと思う。

ポジティブサポートの世界(4)

「その人らしい生き方」を目指して

村田　愛

ポジティブサポートの魅力とは、人を知る手がかりが個の存在にあると認識し出発することにあります。まず、個性として「その人」がどの様な人かを捉えるところから始まります。そして、その捉えた「現実」を積み重ねていくことで、将来が身近に感じられます。

ここで、その人とその現実を知る手がかりを一般社会通念としての手がかりと対比することでポジティブサポートを整理し紹介します。

表1にみるように一般社会通念として人を知る手がかりは、個人の能力やある集団の中での協調性の有無に片寄りがちです。それは、既成の枠に当てはまるか否かが判断基準とされているからです。

ポジティブサポートは「その人らしさ」とか「生きがい」を追求し、それらがその人の生活に生かされるよう

▼表1　ポジティブサポートと一般社会通念としての手がかりの対比

一般社会通年としての手がかり	ポジティブサポートの手がかり
・能力	・その人の関心／夢／希望
・何ができるか／できないか	・何をしたいか／どんな人か？
・位置付け（ファイリング、あてはめ）	・個として個性を捉える
・一人で生きていけるか（自立）	・いかに他の人と共に一緒に生きていけるか
・規制（コントロール）がきくか、きかないか	・（自分の人生を）主体的／個性的に生きていく
・予想（予測）	・展望
・既成の社会に合わせる	・本人の望む方向が見えてくる
・将来の為の現在	・現在を積み重ねて将来ができていく

力を合わせていくことを目指します。「その人らしさ」とか「生きがい」を考えることは、凡庸な評価基準や既成の枠をなぞっていくだけでは不可能です。周囲が持っている価値基準だけをベースに評価をしていくと、その人そのものが見えなくなることがあるからです。

個の人／個性を大切にする

個の人／個性を大切にすることや主体性を重視することが、人をわがまま／自分勝手にするという考え方もあります。しかし、私は違うと思います。個の人／個性を大切にすることこそが、「人の尊重」という最も大切な関わりの基盤です。そして、主体性を重視するということが、自分自身の人生を生きている感覚をもつカギになると思います。主体的に生きるということは、自身で考え、決定しなければなりません。それには、もちろん責任が伴い、生じる結果を引き受けなくてはなりません。

私は、知的障碍のある青年を対象にした週二回のグ

ループに関わっています。そのグループは、仲間としてお互いに支えあい協力しあい、自分がどのように過ごしたいかを選び、自分らしく日常の生活を楽しむ場として開かれています。そこでは、年齢相応の活動や関わりを大切にし、その時その時仲間の提案にそった過ごし方をしています。例えばカラオケに行ったり、おしゃれしてクリスマスのお買い物に出かけたりしています。

そこに来ているゆりさんは、グループの中で料理・配膳や人をおもてなしすることが大好きです。毎回のグループの献立を決め、買い物、調理、配膳を楽しみにやってきます。そのことから、ゆりさんの将来の夢は何だろうと考えました。好きなことを生かして、具体的に「仕事」として新しくチャレンジしてみたら「今」より手ごたえがあり広がりのある「自分らしい」生活ができるのではないかと考えました。

「ゆりさんらしい生き方」を考える

ポジティブサポートのように、ゆりさんの関心のあることや可能性をベースに近い将来実現可能な変化を考えたのです。すでにゆりさんが好んで行っていることを考えてみると、飲食業がいいのでは？　と思いました。しかし例えばどこかの飲食店でウェイトレスとして働くというのは、唐突すぎるような気がしました。ゆりさんの場合、お給料をもらうことが仕事に求める一番大事な要素だとは考えなかったからです。まして、不特定多数の知らない人達と接するサービス業（飲食業でウェイトレス）に、彼女が喜びを感じるかどうかもわかりませんでした。

まずは、ゆりさんが大好きな人のところで週一度開かれている小さな集まりでの調理、配膳、おもてなしのアルバイトをジョブコーチと共にしてみるという具体的なアイディアが生まれました。それをゆりさんに話し、お

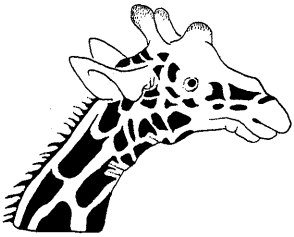
仕事をしてみる気があるかきくと、即答で「する」と答えたのです。ゆりさんのお母さんにも尋ねてみました。ゆりさんが「仕事」をするという発想も無かったし、もちろんお給料をもらえるなど考えたことが無かったとおっしゃっていました。初めての試みなのでゆりさんが「仕事」という認識をどの程度しているか、そしてしっかり定時に継続して通えるかどうかは半信半疑だったようでした。しかし、そのアイディアは、初の「仕事場」としてゆりさんの緊張感がもっとも少なくできる環境と思ったようでお母さんも喜び、次の日からゆりさんのアルバイトは始まりました。

「仕事」を通してゆりさんが教えてくれること

◇ゆりさんの「現実」

ジョブコーチは、その時その時の仕事内容をゆりさんに伝え、最初の段階では彼女の仕事を一緒に行います。そして、彼女が必要なことを一緒に考え、徐々に教え、サポートしながら、彼女が将来的に仕事を一人でできるようになるよう、計画的にサポートしていくことがジョブコーチの仕事です。そこで大切なことは、ゆりさんの意欲ともちろん頼まれた仕事を実際に行うことです。

彼女は右側の身体に麻痺があります。しかし、彼女は右側の手先の不自由さを右側の腕や口を工夫して使うことで補っています。彼女は自立心が強く、自分でできることは自分で行いたいと思っていることがまわりにいる人の想像を超えていることもあります。（幼い子どものように）守られる存在ではないと主張していたようにも思います。周りにいる人がゆりさんの片手が不自由だからと言う配慮でグラタン皿を持ってあげようとする時、ゆりさんは嫌がったりします。ゆりさんにしてみたら、周りの人に先走って



手を出された感じがしてしまうのでしょう。自分の仕事を自分でしたい／できることに、手を出された感じがあるのでしょう。ジョブコーチがゆりさんにグラタン皿が重たく熱いことを伝え、オーブンから出すことができるかきくと、右腕をうまく使い「自分でやる」と言う時もあります。もしくは二人で相談し、ジョブコーチがグラタン皿の右側を持ち、ゆりさんが左側を持ちオーブンから取り出すこともあります。そのようなことも、ゆりさんらしさです。

彼女のことに関しては、周りの人に決められるのではなく、ゆりさん自身で決めたいのでしょう。相談もされずに、手を出されたくはないのでしょう。自分で工夫してやりたいと思う気持ちの強さに感心してしまいます。

彼女が必要としていることのサポートが必要なのです。それには彼女が必要だと感じることをゆりさんが周りの人にその時伝えることが重要になってきます。

◇「仕事」に対する意識

初めから「仕事」に対する緊張感と責任感をゆりさんは持っていました。自分のやり方や自分のペースを大切にしたく、時間制限があると言われるのは好きではない彼女が、「仕事」には比較的柔軟にこなしていきます。例えば、本当はいつも食材の切り方を自分で決めたいと思っていても、ジョブコーチが初めに献立によってちがう切り方を見せるとそれを実行してくれるのです。

昼食を作ることも仕事であれば、お昼の時間にはお客さま達が食事できるように配膳を終えなければ困ってしまいます。それを実際にゆりさんは受け止め、一生懸命やろうとしてくれるのです。それは、仕事意識といえると思います。もう一年ほど継続して働いてきて、ゆりさんは仕事内容も手順も把握しています。献立によっては長い時間が掛かることをジョブコーチがゆりさんに説明した後に、時間に間に合うように仕事を先に行おうとすると、ゆりさんは自分がやると急いで調理場に来てくれ

るのです。

初めのころは、彼女の調理する献立は、彼女に決めさせてもらっていました。それは、彼女の「仕事」の意欲に大きく影響を及ぼしていました。今では、リクエストを聞いて献立を決めることも増えてきています。それは、きっと周りの人達を想い調理・配膳した時に喜んでもらえる、よりいっそうの満足感・充実感があるのではないでしょうか。

一度だけ朝眠くて、仕事に行かないとゆりさんが決めた日がありました。その後ゆりさんには、仕事は嫌ならやめてもいいものだということを伝えました。無理に仕事を強いるのがこの「仕事」の目的ではないのです。しかし、仕事場では、彼女を期待して待っている人もいます。彼女の役割がある今、気が向かないという理由で休めば、雇い主は困り納得しないでしょう。どうしたいか（辞めるか続けるか）決めて欲しいと雇い主からゆりさんに伝えてもらいました。彼女は焦ったようでした。休むことがそんなにも影響力があると思っていなかったのかもしれません。そんなにも期待を裏切ったことが彼女には響きつらかったのではないでしょうか。「続けたい」。もう一度握手をして「契約」を続けようとゆりさんは雇い主を説得しました。

もちろん必要以上のプレッシャーをかけることを目的としてそれらを伝えたのではありません。彼女には自分の決断に対して、結果を引き受けるだけの力（自信／プライド）があります。彼女が機会を得た時、彼女が仕事をすることを決め、「契約」という形で雇い主と約束しこのアルバイトが始まりました。それこそ彼女の自己決定であり、やめることを選んでいけないわけではないのです。ジョブコーチも雇い主であるゆりさんの大好きな人も、ゆりさんがそこを引き受ける為のサポートならするつもりでゆりさんに話したのです。そう考えてでも、彼女が自分の決定したことに対して責任をとる機会をチャンスと考えたのです。

自分の人生を生きている感覚は重要で、なによりも必要だと私は思います。つまり、豊かな選択肢と自己決定する機会こそが「生きがい感」に最も影響を及ぼすと言っても過言ではありません。人は、自己決定することや、その結果を引き受けることのサポートを、必要としているといえるのではないでしょうか。

個性と可能性を発揮する時

ゆりさんは、「言葉」で自分の思いや気持ちを表現するわけではありません。しかし、ゆりさんなりにお客さま達に伝わりやすいように表現を工夫することが増え、お客さま達はゆりさんの表現を感じ取り「ありがとう」とか「うれしいわ」とか「ゆりさん楽しそうだね」と声をかけてくれます。お客さまを含む仕事場の人達はゆりさんそのものを見ています。ゆりさん自身を尊重しているのです。これらの仕事場での経験は、ゆりさんが受け身ではなく、発信者として周りの人達とコミュニケーションをとり、自分の行為と存在に対して期待され感謝される大人として、社会に参加する一員であるゆりさんの自信とプライドを持てる経験だと思います。

自己決定は、容易なことではありません。ゆりさんは自己決定を体験し、その結果を引き受けることで輝きを増しています。そうして「自分らしい生き方」をしているという実感が持てるようになってきたのでしょう。

ゆりさんの仕事ぶりを見ていて、感動に近い感覚を何度も味わうことがあります。そのゆりさんの一生懸命さ、責任感、ひたむきさに圧倒されてしまうのです。あたり前のように、彼女の役割としてゆりさんは仕事をします。お客さまにも丁寧に接し接客します。そして、皆さんが帰り、ゆりさんの仕事がすべて終了した時、一息ついて、時には大きくため息をついてジョブコーチと大好きな雇い主と三人で一緒にお茶を飲み、「お疲れ様でした」と言われると嬉しそうにします。そして、家に帰る途中でまた嬉しそうに身体をゆすったり、大きな声で

笑ったりします。社会人として生きはじめた今、仕事を終えてお家に帰ることに、よりいっそうの喜びを感じるようです。

確かに仕事の緊張感で疲れることもあるでしょう。でも、ゆりさんが、彼女の存在そのものに自信をもってきていることは間違いないと思います。御両親が、お仕事帰りのゆりさんに「今日はどうだった？」と言うと、ゆりさんは誇らしげにお給料袋を見せ、大切に溜めているそうです。

「私は仕事しているの」というプライドを感じ、「その仕事を私は好きなのでしている」という充実感は、何にも変えられない一人前の社会人的感覚なのでしょう。

人は可能性に富んでいます。その人にとって魅力的な環境あるいは冒険をする機会を得ることで、現実は開かれ充実していくと私は信じます。そして、機会に巡り合うことで、周りの人の認識や期待以上に、その人の人格の奥深さがうかがえることがあるのです。

現実をふまえ、理想を現実的に追求するということ

ポジティブサポートは、その人らしい生き方を追求し、実現していくことを目指します。好きなことを行いながら生活していくことと、それに伴う周りの人々のあたり前の評価／感謝は、生きる喜びにつながります。そして、人は成長していきます。ゆりさんにとっては、仕事という社会的な役割があること、それに対してお客さま達に感謝されることの喜びが彼女の意欲的に生きる支えになっていると思います。

ゆりさんの表現も豊かになり、複雑な心境や要求も表現するようになりました。例えば、自分のやり方が正しいのかどうか尋ねる

ような仕草をしたりします。自分は困っているということや具体的なことに関して助けが必要だとジョブコーチに伝えます。そして、時には仕事中、「これはこうするんだよね」という仕草で注目を得て、その後自分で拍手をして一緒に拍手をしてもらいたいかのように促します。ジョブコーチや雇い主が、拍手をすると嬉しそうにまた仕事を続けます。自分自身に自信を持つことで、ゆりさんは自分を切り盛りし、自分の気持ちをふるいたたせることもできるようになっているのだと嬉しくなります。

ゆりさんの変化を目の当たりにし、自分に合ったその人らしい生き方は人を輝かせるものだと確信します。障碍の種類や能力（できること／できないこと）で振り分けられるプログラムに通うことは、「彼女らしい生き方」と感じられなかったのではないかと思います。そのプログラムは、あまりに狭く、限られた将来の選択肢に適応させる為の準備に過ぎないことに彼女は気付き、なんとも言えないつまらなさ、重苦しさ、一言でいえば希望の無さを感じていたとしても誰も驚かないでしょう。しかし、今、彼女の人間関係は拡がり、彼女の世界観が変わったのではないでしょうか。自分のできることを生かした「自分らしい生き方」を、自分は選んで生きていると感じていると思うのです。

ポジティブサポートは、現在を積み重ねて将来ができていくという、「将来」の捉え方をします。たえず現在を見つめることが、次への可能性・方向性へとつながっていきます。将来、ゆりさんが望む時、より広い社会に出て、軽食を出す喫茶店で働くことも選択肢として考えていきたいと思っています。その時、その時、より「その人らしい生き方」を、と考えサポートしていくことをポジティブサポートといいます。

（ポジティブサポート研究室主宰）

手づくり活動の楽しさ すばらしさ(7)

浜本昌宏

手づくりのコマで

ある保育園で三歳児たちが、ドングリゴマで遊んでいました。保育者がつくったものです。

年長児から小学校にかけて、子どもたちは、本格的な「コマ」をつくり、遊ぶことが出来るようになります。

よくまわる「コマ」を紙バンドでつくってみましょう。

紙バンドは、梱包用につくられた厚い紙テープ状の紐ですが、幅広い活用が考えられます。

中心軸を竹串とし、水で湿らせて柔らかくした紙バンドに糊をつけながら丁寧に巻いていきます。（速乾のりがよい）。

良くまわるコマであるためには、心棒が垂直で、重心が低く、全体のバランスが大切となります。

最初は、紙バンドを半分に割き、（巾約七ミリ）、一メートル位の長さで、竹串は約六センチ位のもので挑戦。

彩色して、色の美しさを楽しんだり、コマ回し大会で競い合ったり、紙の皿やお盆を土俵にコマ相撲をしたりするのも活気があって嬉しいですね。

紙バンドが入手できない場合は、厚めの工作用紙を切断して活用しましょう。（元三重大学）

☆紙バンドは製造元（上田産業　〇五四五―三三―三二一〇）から直接取り寄せると格安です。

巻き始めは、しっかりと

障碍をもつ幼児の保育(15)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

見ること　その二

子どもが見ているものを一緒に見てたのしむこと

M　子どもが見ているものを一緒に見てたのしんでいると、子どもが何をしようとしているのかが見えてきます。このことは障碍をもっていてもいなくても、どの子にも共通です。僕は遊び始めにはできるだけ口をはさまないで、まず子どもが見ているものを一緒に見ます。少し時間をかけて見ていると子どもの心が分かってくるんです。

F　私は自分が面白く遊んでいることが多いかな。そうすると子どもの方から「なにしているの?」というようにのぞきこんできて。でもじきにそれを取って、

「こうしたら？」とか、「こうやったらもっとよくなるよ」と教えてくれる子もいます。私の遊ぶ姿が刺激になって、それとはあまり関係なく自分で遊び始める子もいます。

M　両方の場合がありますね。子どもが何を見ているかは結局は分からないんだけど、楽しんで一緒に見ていると、だんだん分かってくるんです。

水の流れを見る子ども

M　先日、一人の子どもが、庭で水の流れるのをじっと見ていました。私もそこにしゃがんでかなりの時間一緒に見ていました。小さな木の葉が水と一緒に流れてゆきました。その木の葉が何かにひっかかって水がうまく流れなくなりました。しばらくすると、また木の葉はくるくると回りながら流れ始めました。見ていてとても面白いんです。

F　私も同じような経験があります。公園の橋の上から、小さな川の流れをいつまでも見ている子がいて。その子の母親が言うには、この子は外出が好きで、いろんなところに行くが、水の流れを見るのが好きで、流れ方がわるいと怒ると言うんです。

M　だれでも、水が流れるイメージを好むのは自然なことではないかしら。車に乗っていても、流れが滞ると怒る子は多いでしょう。少し飛躍するけれど、一日の生活の流れも、つっかからないでうまく流れていればいいのだけれど、不自然に妨げられると子どもは苛立ちますね。

F　本当にそうね。水の流れを見ている子どもも、水そのものを見ているというより、流れのイメージで見ていると言ってもいいのではないかしら。見ながら体が揺れたりしていますよね。

石を見ていた子ども

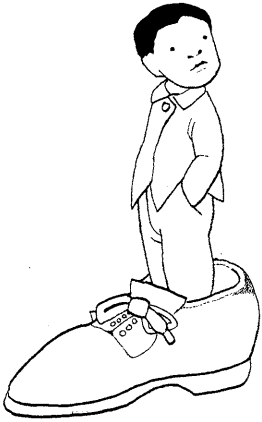
M　これもつい先日のことだけれど、子どもの視線が

いっているところに何があるのかと、私もそっちを見てみると、その子は落ちていたきれいな石を見ているんです。私がそれを拾って子どもに差し出すと、はじめて出会ったその子がにっこり笑って私を見ました。母親が、この子は石が好きなんですと言いました。その石は滑らかで特別にきれいな石でした。

F　石が好きな子は多いですね。大人から見たら、泥がついていてきれいとは言えない石でも。

M　ちょうど庭には同じように滑らかな石がいくつも落ちていたので、私はそれを拾いながら、この石の何が子どもの心をそんなにひきつけるのだろうと考えました。石は固くて、投げても踏んでも形を変えません。そのように、子どもは心の奥で、いつも変わることのない固いものを求めているのだろうか。一緒に石を探しながらこんなことを考えていると、子どもと一緒に石を探すのが一層楽しくなります。

F　私がこのごろ始終相手をしている孫も、自動車の形をした石を拾います。形としては車のように私には見えないので、黙って見ていると、土の上を「ブーブー」って、手で押して行きます。そうすると、なんでもない石が、「ブーブー」のように見えてきて、私もおもちゃの自動車にして本当に面白く、わくわくした遊びになりました。孫に遊んでもらっているみたいですが、……（笑い）。



肯定的な目が子どもを生かす

M　大人が子どものすることを面白いと思って見ていると、子どもは一層たのしくなって次々と遊びます

ね。僕は始終こういうことを経験しています。子どもは、自分のすることを意味あるものと思って大人が見ていてくれると、自分で工夫することも多くなるし、子ども自身の発見も多くなるのではないだろうか。

F　うちの一歳八カ月の孫は、食事のときに顎の下に母親がはさんであげるハンカチを、遊ぶときに自分で顎の下にはさんで、それが落ちないように歩いているんです。そのしぐさが可愛くて、大人が笑った。最近、顎の下にミニカーをはさんで見せに来たので、両親が大笑いしたと話していました。子どもはそれが嬉しくて何度も繰り返しては笑いました。子どもには大人が喜んでくれることを見せようする気持ちがあるのね。見られることと見ることとは相互的で、同時的なことなんですね。

M　子どもがすることを大人が可愛いと思って見なかったら、子どもの成長はつまずくでしょうね。

どの子でもするような小さなことを、障碍の子だからこんな変なことをするというように見たら、相互性そのものが体験できないのではないでしょうか。

否定的な目は子どもを萎縮させる

M　ひとりの子どもが草の葉をちぎりました。草を折ったらお花がかわいそうでしょうと大人が言いました。その子は手を止めて、その大人を見上げました。その子は落ちている小枝を拾って指先でぐるぐる回しました。その人は、目が回りそうで気持ちが悪くなると言いました。それは何げなく言ったのだろうけれど、母親はこんな変なことをやるのは普通ではないだろうと心配しました。障碍をもつと診断された子どもの相談のひとこまです。

F　乳幼児期には、どの子も多少の成長の歪みをもっていますよね。それに専門家と言われる人から診断名をつけられると、その歪みの部分にばかり目がいってしまう。でも、毎日子どもと生活をともにする親や保

育者は、その子のもつ、他の人では感じとれないような繊細な感覚に気が付きます。それを大事にしていきたいと思います。

M　前回、自閉症の子は目が合わないといわれているけれど、子ども自身が目を合わせたくないのだと話しました。繊細な感覚をもつ子どもは、大人の否定的なまなざしを敏感に感じ取って萎縮してしまう。「自分らしく生きていいのだよ」と励ましていると、大人に信頼を寄せるようになります。

否定的に見られると、子どもは大人の困ることをしはじめる

M　私の養護学校の子どもで、小さい子の髪を引っ張る子どもがいました。注意して見ると、その子は私が小さい子と遊んでいるのを見ると素早く走って来て髪を引っ張るのです。こういう場合、ただ乱暴な子どもと考えて、叱るだけでは済まないでしょう。その子は普通に歩くだけで階下の住人からうるさいと文句の電話がかかってきて、両親は極度に神経質になり、子どもはただ歩くだけで、静かにと注意されていました。見られることが喜びではなく、マイナスの感情を呼び起こすことになったのです。私はその子に優しい目を向けようと思い、一生懸命になりました。実際にはそれはとても大変だったんだけれど。

F　あなたはそのときどう考えてその子にかかわったのですか。

M　僕はそのときは、何はおいてもその子のことを優先させて考えなければと思ったんです。ちょっと目を離すとその子は小さい子の髪を引っ張って、あちこち

で泣き声が聞こえて。保育どころではないという具合だったから。職員たちの協力を求めて、私がその子に専念させてもらいました。それができたのは幸いでした。

F　そういうことって、よくあることね。私が見ている子どもなんだけれど、その子は家でときどき大声を出したり、叫ぶんです。引っ越したばかりで、隣の家から文句の電話がかかりました。その子が外に出ると、変な子だと鋭い目で見られました。その子は隣家の前を通るとき、顔を伏せて人を見なくなりました。この場合は何カ月もかかってしまって。地域の児童館にも随分お世話になって。でも、近所の年配の方から「少しくらい文句をいわれたからって子どもを叱っちゃだめよ」と励ましてもらって、両親はほっとしたと言っていました。

みんなの見る目が優しくなるように

M　子どもが何を見ているかということを話してきて、つい話は大人の目のことになってしまいました。他人の見ていることは結局は分からないから、自分が何を見ているかと言うことになるのは自然なことですね。しかも、自分の目は自分では見られない。

F　だから、子どもが大人に示す行動によって、大人自身の目を確かめるのですね。

M　自分の目に含まれる瞬間の心の思いが相手には伝わってしまうから、大人は子どもを見るときの自分の目が優しい目になっているかどうかにときどき意識を向けることが必要になるんですね。

F　ほんとにね。

子どものいる風景(4)

今、子どもたちのあそび場は

―ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場(2)―

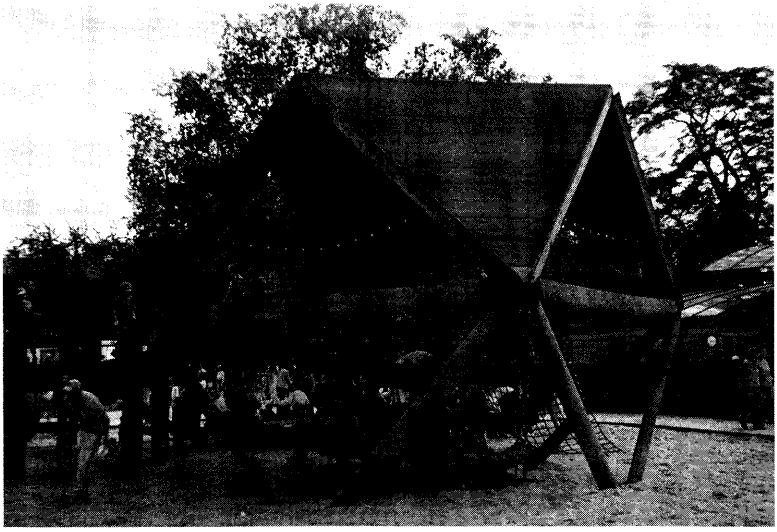
小林　美実

前回にひきつづき、ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場について書いてみたい。広い変化に富んだ水のあそび場につづくように、結構大きな木製の家が数棟ある。どれも不思議な家で、壁にあたるところが全部太い縄を編んだ網でできていたり、高床式の家だったり、柱や板の間をくぐってあちらこちらから出入できる家だったり、どれも大変ユニークである。家々の間は、しっかりした橋やつり橋のようにゆれる橋などでつながっている。板で囲われた薄暗い家の中では、小学校高学年か中学生位の男の子が数人腰をおろして、なにやら真面目な顔つきで話をしていた。このくらいの年になると、隠れ家風の場所が気に入るのだろう。小さい子どもたちは、もっぱらゆれる橋を渡ったり、網の壁や狭い板の間をくぐったりぶらさがったりして歓声をあげてい

る。おいかけっこをしているグループもある。

もう一つ、この場所では大きな二つの黄色い山が目立っている。それぞれ茶色の濃淡の低い山脈を従えている立派な山だ。高いところからは長短いくつもの滑り台があるが、特に一番高い山から水といっしょに滑り降りるものが一番人気らしい。豪快に滑り降りたり、水に逆らってのぼったりしている。勿論何も無い急な斜面を一気に滑り降りる子どももいる。山脈の部分には池もあり、素っ裸やパンツだけの子どもたちが水しぶきをあげている。

ここでも水が子どもたちの遊びを面白くしている。山のそばまで行ってみたが、けっこうな高さで、とても登る気にはならない。子どもたちは苦も無くさっさと登ってしまうが、時々挑戦する大人は両手をついてへっぴり腰だったり、途中であきらめて降りてしまったりして、周りの大人たちにひやかされたり。それもまた楽しいそうだ。岩壁には適当なところに手や足をかけられる凹みもある。危険に対してそれなりの配慮はしてあるようだが、それにしても見ていてハラハラ



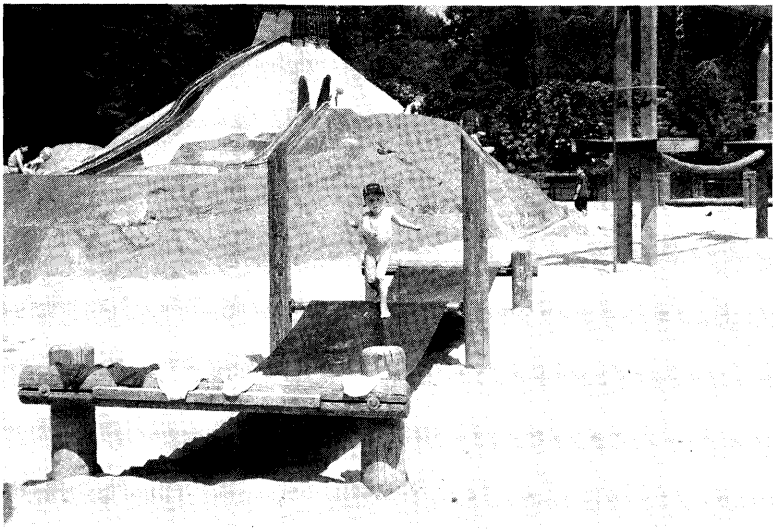
▲網と縄で囲まれた家

する。しかし子どもの身のこなしや動きの早くて巧いこと。

そして登りやすいところや登る方法をすぐ見つけてしまっては、また新しいルートをさがしている。四、五歳ぐらいの結構小さい子どももいる。素っ裸になって水しぶきをあげているのは、たいていこういう小さい子どもたちである。本当に嬉しそうに遊んでいる。山のそばのベンチでは、その親たちだろう、面白そうにわが子の冒険的なあそびを見守っている。心配そうな表情や、あそびに口出しするようすはない。また、子どもから目を離して、大人同士で話し込むこともない。ことばを交わしていても、目は子どもを見ていることに感心した。子どもが熱中してあそぶようすを見るのが楽しい、好きだ、自分たちも楽しく幸せになる、という一昔前までの街中の大人たちのようだ、と思った。

山の隣の平地にも、ユニークで、なかなかエキサイティングな遊具が作られている。まず幅一・五メートル位の長い鉄板がある。子どもがその上を走ると、ビヨーン　ビヨーンとうなりながらゆれて地震のように波うつ。カメラを向け

▲黄色の山。手前の山脈部分に池がある。



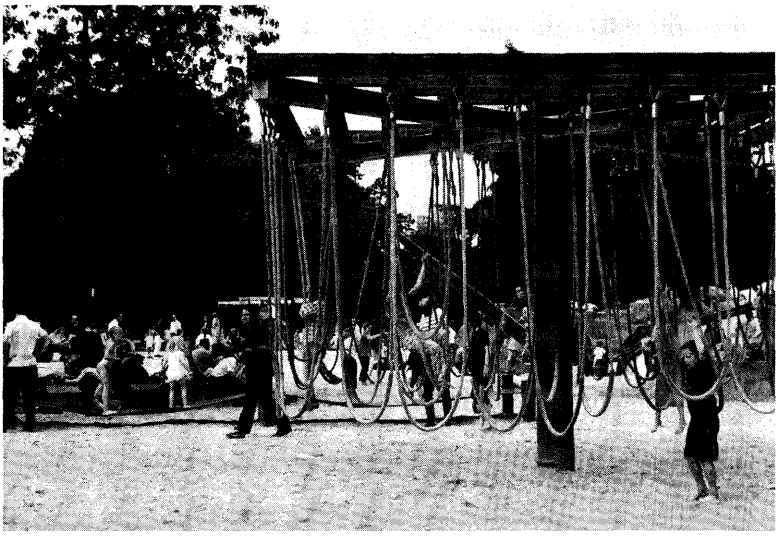
▲鉄板の上を走ってみせてくれた男の子

ていると、五歳くらいの裸ん坊の男の子が勢いよく鉄板の上を走ってくれた。走り終えると私のほうを見て、得意そうに、にこっと笑った。鉄板をささえる木の棒に、水あそびで濡れてしまった小さいパンツがいくつも干してあるのが愉快だ。この子のパンツはどれだろう。聞こうとしたが、すばやく山へ走って行ってしまった。子どもたちは時々走ってきてはこの鉄板の上を走りぬけ、またどこかへ走って行く。この遊具だけであそぶことはなかった。すごい運動量だな、とつくづく思った。これもまた私たち大人には勇気のいる遊具だ。体の硬い大人には危険で、とても挑戦する気にはならないだろう。しかし渡れた時はどんなに気分がいいだろう。

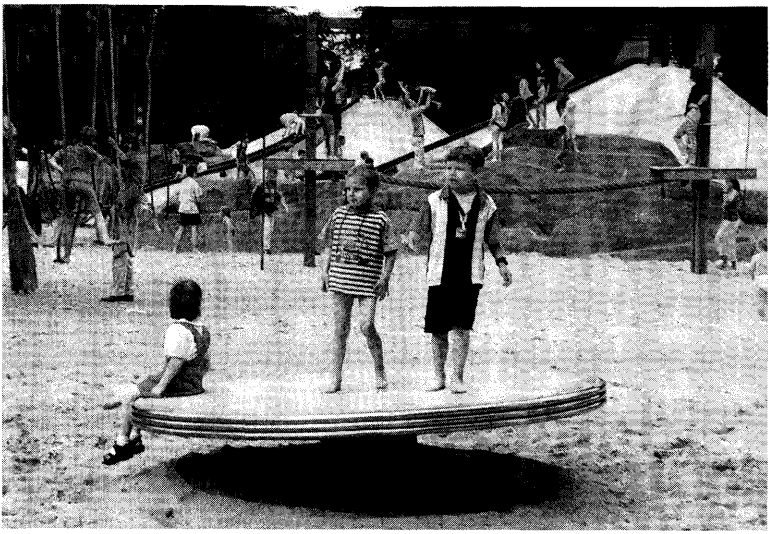
高い広い四角の天井から輪になった太い縄が、丁度地面から五十センチメートルくらいの高さまで、いっぱいぶらさがっている遊具がある。子どもたちは、ぶらさがったり、よじのぼったり、ゆらしたり、綱をわたったり、いくつもの綱をまとめて掴んだり、綱の間でサーカスのようにでんぐりがえりをしたりしている。いろんなことが出来るのだな、と感

心していると、綱渡りしながらの「つかまえっこ」が始まった。足を地面につけても鬼になる。いろんなあそびが生まれるものである。

大きな木製の円盤の遊具は、中心だけで支えられ、ぐらぐらとよく動く。小さい兄弟がのって、体で上手にバランスをとりながらあそんでいた。移動するとゆれ方が変わる。どっちが長く乗っていられるか、競争しているらしい。弟の方がすばやくて上手そうだ。途中で女の子が来てはしっこに座ってしまった。ちょっとの間だが、兄弟がじっとゆらさないでいたのがほほえましかった。ドイツでは、男の子は女の子に対して親切にし、何かにつけ庇ったり守ったりすることが当然とされてきた。初めてドイツにホームステイした時、それが騎士道の精神である、ときかされて、なんて古臭いことをと驚いたが、今でもまだその傾向は少し残っているのだろうか。私の友人の娘たちは親切に守られているうちに、大変強く育ちすぎたようだが。この他にも、太い一本の綱の上を、上からさがっている取っ手につかまりながら歩いて渡る綱渡



▲輪になった縄の下がっている遊具



▲円盤。突然に女の子に座られて、困ったような表情の兄弟。後ろに2つの山と綱わたり風の遊具がみえる。

り風の遊具や大きなシーソーなどもある。

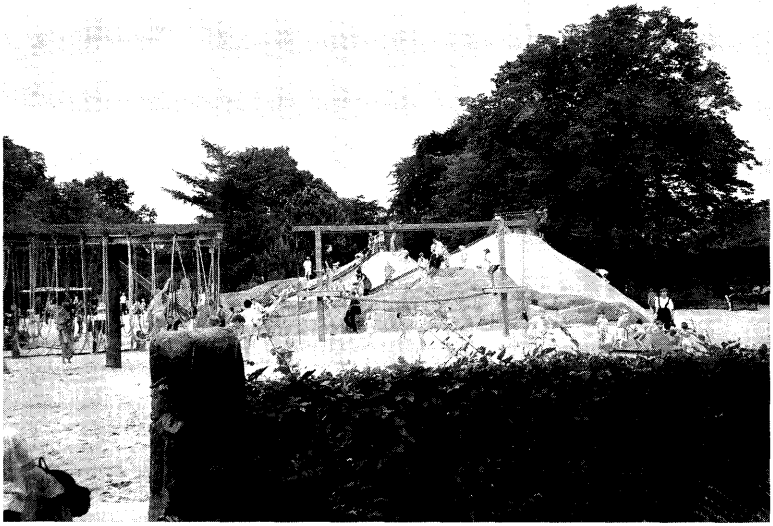
このエキサイティングなあそび場の奥に、大きな木々に囲まれた静かな広場がある。零から二歳くらいの子どもたちのあそび場で、滑り台、梯子、階段、部屋やコーナー、渡り廊下や橋、みはらし台やベランダなどがある大きなカラフルな木製の遊具の他に、中小さまざまな大きさの木の家、ベンチ、砂あそび場などがある。このあたりの土は川砂のようにさらさらとしているので、土の上に座ってあそぶことも出来る。芝生の部分もある。そこに乳母車に子どもを乗せて親たちがやってくる。回りの鬱蒼とした木々のおかげか、隣のあそび場の子どもたちの声や騒ぎも気にならない。子どもをあそばせながら、大人たちも静かに話をしたりしてゆったりと過ごしている。

このあそび場は、勿論ブランコ、滑り台、砂場などがあるごく普通の公園とは全く違うが、以前紹介したプレイパークとも違う。プレイパークのように、子どもが自分たちであそび道具や場をつくったりはできないし、火を使ったり動物を

飼ったりはできない。大人によって設計され造られた場所であり遊具である。その点では、ニューヨークのマンハッタン子ども博物館とおなじだが、こちらは野外で、しかも遊具がどれも非常に大胆に刺激的に造られている。ここで起きる子どもたちの行動、「あそび」を、作り手の人々はどのように予想して造ったのだろうか。ドイツの森を思いきりかけまわってあそんだ子どもの時代を忘れていない人、子どもの気持ちになれる人、そして、今の子どもたちの置かれた状況をしっかりつかみ、子ども時代の幸せと健康な育ちを考えられる人々によって造られたあそび場といえよう。

今この地でも、子どもたちは決して安全な環境で育っているとは言えない。親たちは子どもに対する犯罪の増加に悩んでいる。幼児については、特に神経を使っている。歩道を歩く時、しっかり手をつなぐ。車の中に子どもを置いてはなれることは、犯罪とみなされる。だからあそんでいる時でも子どもの姿から目をはなさない。といって「あぶないから、やめなさい」「いけません」などの干渉はしない。子どものあ

▲0、1、2歳児のあそび場



▲いろいろな遊具であそぶ子どもたち

そびの力を信用しているように思えた。あそび場はいつも賑わっているわけではない。九十パーセント以上の幼児が、一日中保育所・幼稚園へ、そして小学生は放課後保育所の学童保育ですごしている。だからこのあそび場がいっぱいになるのは、休日である。親たちも家が公園に近いわけではないから、見知らぬ者同士であろう。しかし話題は目の前で豪快にあそぶわが子たちである。しかも、われわれ日本人より社交的なひとびと。すぐコミュニケーションがうまれる。

日本の児童公園やあそび場を考えてみて欲しい。せっかく造るのなら、子どもたちのために造って欲しい。しかもただ楽しいのではなく、子どもたちがいっぱい体と頭を使い、見知らぬ同士でも体をぶつけあい、あそび仲間になれてしまう公園を。

（宝仙学園短期大学名誉教授）

ある日

撮影・平野　清

スノーボードの遊びから

上坂元　絵里

一人ひとりの発想から始まる

四歳児二月のある日、発想が豊かなK児と、彼と一緒に遊ぶことの多いA児が、スノーボードを作りたいと言い出した。

私は段ボールを用意し、二人と相談しながら作り始めることにした。ボードの形を描き、本物の感じを出したいと思い、その子どもの名前をローマ字で書いて魅力的にしてみたりもした。

形を描き終わると、K児は万能バサミを使って自分で切り始めるが、A児の方は「僕は切れない」と言うので私が手伝って切る。

三学期のこの時期、子どもたちはそれぞれに自分の遊びを見つけて楽しむようになっていたので、スノー

ボードを作りたいと言われたとき、他の子どもたちの作りたいという要求が集中することは、ほとんど想定しなかった。むしろA児のボードを作るときには、使っているうちに折れてしまうことがないようにと考えて、二枚重ねにして頑丈に作ったほどだった。足を固定する部分は太いゴムを使うことにする。以前にスキー板を作った際、段ボールで作ったら、足の大きさと長さの調節が微妙で、しかも壊れやすかったという失敗経験があったからだ。使って遊び続けて欲しいから、使いやすいものになるよう工夫をした。

初日は二人が作り上げて廊下で使ったりして終わったが、予想に反して翌日から一週間以上にわたって、多くの子どもたちが次々と作りたいと言うことになった。

私は大慌てで段ボールにボードの形を描いて、子どもたちに自分で切るように渡す。段ボールを切るのは、四歳児の子どもにとって、力も要るし相当大変な作業である。しかし、手伝おうにも作りたいという要求が次々に続くので、切るところまでとても手が回らない。後から考えると、形を描くのも子どもにも委ねても良かったのでは？　その方が、子どもらしい物が出来あがったのでは？　という思いもある。

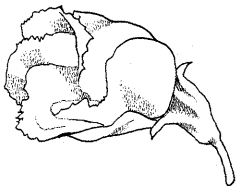
しかし、その時は「先生、切れない」と訴えられても「先生、手は二つしかないからとても切ってあげられないわ」と応えるしかなかった。子どもによってははさみの先を刺してブチブチと穴を開け、形はデコボコになりながらも何とか切って（殆ど引きちぎる？）いた。「欲しい、作りたい」と強く思うと、必死で、何とか今出来るやり方で形にしようとする姿がみられる。頼もしいたくましさを感じ、微笑ましくもあった。途中で諦めたり中座してしまったりした人は、ほとんどいなかったものの、中には作っただけの人もいた。そのことから、遊びへの思い入れの深さ、集中継続の仕方の個人差を理解することもできた。

スキー場へ行った経験やオリンピック等のイメージから、子ども達はボードの上面をカラフルに色付けしたり、旗の絵を描いたりして、それぞれに自分だけの素敵なマイボードを仕上げた。

苦労して丁寧に作りあげただけに、自分が作ったボードへの愛着も深かったようである。スノーボードを小脇に抱えて園内を歩くのも、誇らしげで嬉しそうであった。後日談だが、年長に進級した六月の初めに、男児が数名お山でボード滑りをやりたいと言い出す。年中児が同じように作って遊びたいという影響を考えると、時期が少し早いのではと担任は考えたのだが、その中の一人U児は、翌日スノーボードを家から持参し「これを使って滑る」と言ってきた。大切に保管していたことが確かに伝わってきて嬉しいことだった。

「遊戯室のスノーボード場」

二日目に取り組んだY児、D児たちは、ボードを作り上げると遊戯室に出かけ、大型積木と板でスノーボードの遊び場を作ろうとする。板を斜めにして傾斜を作ろうとするが、斜めにした板を固定するやり方がうまくいかず、板がずれてしまう。とても滑る事はできないし危ない。それを見て、私の方で斜めにした板の先に、板や積木を置いて固定するやり方を示してみる。滑る板の長さは短く角度も小さいが、手作りのスノーボードで滑ると何だか本物の感じが出る。スノーボードは片足につけているので、もう一方の足でスピードをコントロールすることも出来るので、見ていて危ない感じもなく安心する。



少し時間がたってから様子を見に行ってみると、斜

面の周りを取り組むように場が出来ていて、スノーボードを足につけた子どもたちが数人、並んで順番に移動して、滑るのを待つようになっていた。先ほどと較べると場が広がり、六、七人の子どもたちがいて、ずいぶん本物のスノーボード場らしくなっていた。

翌日以降も登園するとすぐに遊戯室に出かけ、スノーボード場を作る遊びが続く。最初の二、三日は、Y児を中心とした場作りであったが、その後はM児やT児といった女児が中心となっていく。遊びのメンバーが変わっていっても、板で斜面を作る場作りの手法は、初日から受け継がれつつ、微妙に変化していった。さらに、性差に影響を受けず一緒に混じりあって遊べるというのも、いいなと感じたことのひとつであった。

S児は唯ひとりスキー板を作る。自分の主張がある。出来上がると張り切ってスノーボード場で滑ってみたものの勢いよく転倒してしまい大泣きする。スキーの場合は、新聞紙を丸めて作ったストックでは勢いを止められずスピードが出てしまった。私も気がつかなかったことで、痛い思いをさせて申し訳ないと思いつつ、微笑ましくもあった。

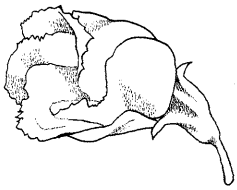
遊びの中のテーマ「滑る」

六、七年前、アニメの影響で、子どもたちが「ミニ四駆」と呼ぶミニカーを作って、さまざまなコースで走らせて遊ぶことが大流行した。その後、車を走らせる遊びが変化して、いろいろなキャップや円筒上のもの（セロテープの芯等）を「転がす」遊びへ転換し、長い期間遊びが続いたことが印象に残っている。

今回のスノーボードの遊びは「滑る」ことがテーマである。幼稚園の環境を見渡すと、園庭には　何種類かの滑り台・築山等、滑って遊ぶ場が沢山ある。三歳児にとっては小さい滑り台の階段を上ったり滑りおりたりすることだけで大冒険。それが四歳児になると、

滑り台を下から登ってみたり、寝転がって滑りおりてみたり、様々にからだを使いスピード感を楽しむようになる。さらには、バケツに入れた水や砂を運びあげて滑り台を落としてみたり、困ったことが起きたりもする。園庭の築山は十年近く前に作られたが、草が生えるようにしたいと種を蒔いて努力しても追いつかないほど、子どもたちの遊び場として活用されている。現在はかなりツルツルの泥山で、滑りながら登る緊張感、走って降りてくるダイナミックな心地よさを、保育者も子どもたちと一緒にしばしば体験している。段ボールを持ち出しての築山滑りも、子ども達の定番とも言える遊びである。

今回のスノーボード作りは、段ボールや綺麗に彩色できるペンを材料として製作する素材体験から始まったが、この四歳児達も、築山を段ボールで滑る遊びを体験していた。子どもにとって、興味深い「滑る」というテーマが、この遊びの展開の一つの大きな要素であったと感じる。「転がす」「滑る」等、子どもが興味を持ち、いろいろな素材・材料と関わる、多用な人や場と関わる体験が可能なテーマは、保育の中で大切にしていきたい。



一方、このような遊びの展開だと、誰がいつどのように関わったのかを記録に残すことが難しい。参加するきっかけ、同じときに遊ぶことでの出会い、一緒の場にいながら関わりはほとんどない等、細かく見取れば多くのことが見えてくると思うのだが、大きなきっかけを作った人や場面の転換等は追えても、なかなか細かいところまで捉えきれないジレンマも強く感じさせられた。

遊びが展開する要素

最初の数日は、家に持って帰ることは我慢してもら

▲大型積木と板で作ったスノーボードの遊び場

う。一生懸命作った物を持ち帰りたいという思いは充分に分かりつつ、作った物を使って繰り返し遊んで欲しいという願いを込めた判断をとった。「どうしてもお母さんに見せたい」と言う子どもには、降園時に見せて園に置いていくよう伝えた。多くの子ども達が作ったボードを収納するために、保育室には大きな段ボール箱を二つ用意した。収納箱の中には沢山のボードが入る。その中から、自分のものを見つけるだけでも結構難しい。時々「私のスノーボードがない」と訴えられて、探してあげることはあったが、さすがにこの時期、自力でよく見つけだすと感心したこともあった。遊びの始まりの時点で、保育者の願いを明確に出したことが、繰り返し遊ぶ、遊びが継続するということにつながったと思う。

スノーボードは、基本的な作り方は共通でどの子もイメージしやすく、その中にそれぞれに工夫する余地もあった。色を塗りながら話をしたり、塗るのをお互

いに手伝いあったり、小さい組にボードを貸してあげたり、作る・遊ぶ両方の過程でいろいろな関わりが生まれやすかったということもある。

・友達が始めたことを面白そうと思い自分もやりたいと思う。・一生懸命自分の作品を作り、その結果できあがった物に愛着を持って大切にする。・子ども同士が関わり合いを持てる場が出来、いろんなメンバーで繰り返し楽しむことができる。逆の言い方をすれば、四歳三学期という時期には、遊びを継続し多くの仲間と場を共有して関われる力が、子ども達に育っていたのであろう。

「滑る」という遊びのテーマ性に加えて、このような要因がいくつか絡み合って遊びの盛り上がりにつながったのではないだろうか。

さらなる育ちへ向けて

この時期、子どもたちは園生活において安定感を持ち、それぞれに自信を深めてきている。周りの友だちがどんな人か、何をしているのかに目を向けるゆとりも出てくる。子どもの興味や発想を生かして教師が後押しをすると、驚くほど集中してダイナミックに遊びを展開できることも珍しくない。ただ、これまでの自分の保育経験の中で、この四歳児後半の素直に伸びる芽を、そのまま年長の生活の中で伸ばしていくことの難しさをしばしば痛感する。

遊びの流れを振り返り、様々に考えてみることが、これからの遊びを支え充実させていく教師の関わりを考える上で多くの示唆を含んでいる。スノーボードの遊びを通して、子どもたちの育ちを実感し頼もしく思うと共に、今後の子どもたちの更なる育ちに関わっていきたいと願っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

特集〈手〉

手と手、夢想

菊地　知子

その一　「出会いの喜び」遊び

小学校の校舎一階、長い廊下の東端にある階段を下りてくると、「ともちゃーん」とかわいい声がする。そちらを振り向くと、廊下の西の端から、手を振りこちらに走って来るこうちゃんの姿が目に入る。

「こうちゃーん」と私も呼んで、両手を広げて走り寄る。同じように思い切り手を広げて駆け寄るこうちゃんをひしと抱き留め、「会えてよかったー」と言うと、「こうちゃんもともちゃんに会えてよかったー」

こうちゃんは四歳。我が子の級友の弟で、来春から幼稚園に行く。彼の気さくな母親同様、自分の母親より八つも年長の私を〝ともちゃん〟呼ばわりする、私の小さな友人である。こうして互いに両手を広げ、出会いを喜び合うことも、彼との間ではかなり日常的になっている。

思い出してみると、こうちゃんとに限らず、諸手を広げて走り寄り、出会いを喜び合うということを、私は、子どもとの色々な場面で、実は多用している。諸手を広げて出会いを待つと、何故だろう、出会える嬉しさは格段に増す。大人同士、肩をひしと抱いたり、頬をくっつけ合ったりして出会いを喜ぶことの少ない私たちの文化にあって、臆面もなく諸手を広げ、受けとめ合えることが、子どもにとっては、と言うより前に、存外、大人の側に、人の温もりを実感させてくれる稀有なチャンスであるのかもしれない。広げた両手と同じ分だけ広げた心であなたを待っている、両手で抱きしめたい程、あなたとの出会いが嬉しい、ということを表現するという、いわば「保育的配慮」に託つけてはみるが、どっこい、保育とか人間関係とかいうものが、自ずとお互いであることに、又しても思いが至る。

その二　受けとめ、受けとめられた記憶

弟の手

弟が姉の頭を叩いている
まだ不器用そうな小さな手で
けれど小気味良いリズムで、
弟が姉の頭を叩いている
叩いているのだけれど
――うん、うん。いい子いい子、できるのね。
と言って、

姉は頭を差し出している。

寝床で

——おかあさん、おててつなごう。

娘に差し出された手を握る。

——おみずのんでくるから、

おててぜったいそのままにしてまっててね。

子どもの手の温もりに代わって、

夜の冷気が私の掌を包む。

私は一時、

私の差し出す手を

子どもがやわらかに拒む日を想う。

そして今は、

掌の中に、

子どもの手がもどってくるのを

しみじみと待っている。

一つ目の記録の「姉」は、二つ目の中の「娘」である。姉四歳、弟一歳の、一九九三年初冬の同じ日に書き留めた二篇だ。戻ることのできる掌、自分を受けとめる手を、私に期待し必要とする、その同じ心が、弟の幼い手のなせる技を愛情と感じ、自らの愛情を以て受けとめようとしている。短いスパンだけで見れば、姉の頭を叩いているその手が、次の瞬間には、猛烈に姉の髪を引っ張っていたりするのだが、少しだけ長期的に見ると、本当に姉を「いい子いい子」する手になり気持ちになってくるので、何ともおもしろい。私がそれを信じて待とうとする時、「いい子いい子できるのね」と、共に信じて待ってくれる姉の健気さは有り難い。

姉の手も、息子の手も、私の手の中に納まる大きさでは、もはやなくなった。先のこうちゃんだって、頻繁に会うことがなくなれば、未練のな

い忘却は幼き者の常、出会いを喜び合うどころか、私を見知らぬ者のようにさえ振る舞うだろう。けれども不安や焦燥に震える時には、あるいは歓喜に駆けだす思いの時には、母の手を、あるいは誰かの腕を、かつてと同じように、探りにきてもいいのだと、幼い日の記憶が語ってくれていたらいい。

（松戸・ひだまり文庫）

手当てについて

酒井　朋子

かなり昔、私がまだうら若き女子医学生であったころのお話です。医学部の授業の中で「手当てとは何であるか？」という、一見、哲学的にもきこえる質問を受けたことがありました。もちろん

毎度のようにわからなかったわけですが、その答えがなんとも面白いものであったことをよく覚えています。その答えについてお書きしようと思いますが、同じく面白いと思ってくだされば幸いです。

皆様は〝手当て〟という言葉をご存知のことと思います。一言に手当てといってもいろいろな意味があるようですが、広辞苑でこのことばを引くと、〝深夜手当〟などの労働、勤務などの報酬の意味とともに、〝応急手当、怪我の手当て〟などとして使われる、医学的処置を示す意味がでています。患部を冷却したり、消毒をして軟膏をつけたり、といった医療行為のことでしょう。この〝手当て〟についてのお話です。

この医療行為の意味の〝手当て〟とは元来何でしょうか。ご想像がつく方も多いと思いますが、この語源は、文字通り、痛い部位に手を当てるということです。誰かが頭を何かにぶつけたとき、急におなかが痛くなったときなどに何気なくその部位に手を当ててあげる、あの行為です。これが元来の〝手当て〟という動作で〝傷の手当て〟などのことばの由来はまさに、患部に手を当てるというところにあります。

この痛い部分に手を当てるという行為は、普段我々がなんとなく自然に行っている行為です。おなかが痛いとき布団に横になり胃のあたりをおさえたり、ぶつけて痛がる子どものすねをさすったりすることは、多くの人に共通した日常的な行為であると思います。しか

しこれはこの〝手当て〟はあくまでもいたわりの行為という要素が強く、そこに治そうという意図はほとんど働いていないと思います。

では、この手当ての実際の効き目はどんなものでしょうか。もし、今現在、腰、膝、おなかなど、どちらかに痛みのある部位がありましたら、是非、手を当ててみてください。効果のほどはいかがでしょうか。さすったりすると、実際、少し痛みが軽くなる気がしたり、少し落ち着いて楽になる感じがあったりすると思います。気のせいでしょうといわれる方もおられるでしょうが、実際ある程度の効果はもたらされるようです。そして、この作用をある程度、医学的に説明することができます。簡易に説明すると、ひとつは痛みを感じているところに手を当てることにより、手の温かみによる直接的な痛みを和らげる効果であり（患部を温めると痛みがやわらぐ）、もうひとつは愛情を受けているという満足感あるいは安心感からくる心の安らぎが、脳で感じる痛みの閾値を上げる効果です。

以上がそのとき授業で聞いた内容でしたが、これこそまさにハンドパワーであります。人間がいつからともなく行ってきた、なんとなくしてしまう行為に、実際、ある種の医学的に説明できる作用があるということは当時の私にはとても新鮮な驚きでした。人間が気のせいと思っていたり、なんとなくおこなってしまう行為は、実際には経験的にその効果を感じているものであったり、意外に科学的に効果の説明がついたりすることも多いのかもしれないとそのとき思いました。

動物がいわゆる〝手〟を持つのは、類人猿以降

のことです。手、足、という呼び方は、動物が立ち上がり歩き出してからのことで、犬や猫においては、前足後ろ足となります。歩くようになると、前足後ろ足は手と足に分かれ、足が体の支持、移動の役割を一手に引き受けるようになり、手は、ものをさわったり、器用につかんだりという役目を担っていきました。そして、人をはじめとする霊長類の手や指は、これにより外界のものと直接接触し、外界からの作用を確認するための重要な感覚器官となっていきました。

人間の手が行う動作の中には、手当てのほかにも握手や、手をつなぐなどの行為もあります。これらは言葉とは異なった、ひとつのコミュニケーションの方法ですが、この行為も、さわる感じるということが感覚神経や脳を介し、複雑に相互作用を及ぼした結果、友情や愛情が伝わるという不思議な現象です。

現在、ハンドパワーというと手品や魔法のようにとらえられがちですが、この種のハンドパワーはどなたも持ち備えた能力です。確かに、いわゆる〝手当て〟は医学的な効果とすれば、薬や点滴の足元にも及ばないのですが、私はこの授業後、この〝手当て〟という手段もっと重要視してもいいのではないかと思っています。子どもが怪我をしたりおなかを壊してぐずっているとき、痛がっている部位に手を当てたり、さすってあげること、また転び、すねをぶつけて泣き叫んだとき、〝痛いの痛いの飛んでいけー〟と手を当ててあげること、これらには、痛みや、不安な気持ちを落ち着ける作用のみならず、言葉とは異なった、原始的であり根源的なコミュニケーションがある気がするのです。

（東京医科歯科大学）

神様からの贈り物・「手」

安西　三恵

「宝物」

人間は二本の足で歩くようになってから「手」という何物にもかえがたい道具を手にいれました。自然という神様が、どんな気まぐれだったのか素敵なプレゼントをくださった！　……そう考えると、とても素敵で愛しい宝物を持っている気がしてきませんか？

母そして私

小さい頃、母は本当によくいろいろな物を作ってくれました。その一つ、「三匹の子ぶた」のブーフーウーの人形はどこで見つけてきたのかちゃんとメキシカンハットをかぶって、まるで今テレビから飛び出して来たかのような、本物以上に本物だったのを、私は今でもはっきり覚えてい

ます。その感動は、何もないところから形あるものを作り出す手のぬくもりと、母の試行錯誤の結晶を子どもながらに感じたからなのかもしれません。正直、子どもの為というよりも母は作ることそのものが好きで楽しんでいたような気がします。それからもワンピースにフェルトで素敵な花をあっという間に付けてくれたり、……。母の手をまるで魔法の手のように思っていました。友達にほめられると、二つとない母の手作りを誇らしく思ったものです。

そのような環境で育った私は人と違う物を持つ、母の手作りというオリジナルの物を持つ快感を楽しみ、いつの日かあれやこれやと手を動かし、人形の洋服を作ったり、粘土で台所セットのミニチュアを作ったり、千代紙人形を作ったり……エトセトラ。不思議と、どんなに歪で不恰好なできでも愛嬌のある姿、形が大好きになって大切にしました。今ほど何でもおもちゃがある時代ではなく、自分で作る遊び道具を楽しみ、その上、自分で作るのですから修理もバージョンアップも可能で、失敗から効をそうすることも多く、その過程も遊びの一部として楽しんでいた気がします。

誰に言われるでもなく、始まった物作りが、今では私の生活の一部となり欠かす事のできない人生の楽しみとなっています。時々依頼されて伺う講習会で必ずお話しするのが、「人間は、二本の足で歩き、手を使うようになってから、本能として考えても、物を作ったり道具を使って何かをするのが嫌いなんてことはないはず！　上手いか下手かではなく、頭で考えたあらゆる物を、試行錯誤して形ある物にする事に快感があるものです」と断言しています（独断と偏見に満ちていようとも）。

子どもの遊び

我が家の長男がまだ幼稚園の頃、お友達を誘い小石川植物園に連れて行った時のことです。私が遊び道具を持って来なかった事を後悔していると、子どもたちは小枝、落ち葉そして石ころなどを使っていろいろな遊びを次々考えるではありませんか。それはとても面白そうで、なかなかのものでした。本当に楽しそうで……。そんな遊び足りない子どもたちを帰りに近くの公園へ連れて行ったところ、多少混んでいたこともありますが滑り台に並んだり、与えられた遊具で遊ぶ姿が「さあ、これで遊ぼう」と誘導されてる気がしました。何故だろうと考えた時、ただの「森」、そこには何もないと同時に何でもある気がしたのです。その中で子どもはそれはそれは貪欲に工夫して遊ぶのです、手を使って。

やっぱり最後は手

私はテレビの特別番組で技能オリンピックを偶然見たことがあります。その部門は「溶接」、「精密機械」など手を使ったその技能の高さを競うものでした。かつては殆どの部門で日本が金賞を独占していたこともあったようです。今では大量生産に伴い機械化が進み、一つ一つ丁寧に人間の手がかかわる事がなくなり、そんな中で人間の技能が低下するのを恐れ、その維持のため行われているものです。ただ、近年人間の技能が再認識され、世界各国が注目し力を入れ始めているとのことでした。

原子炉の中の溶接は、機械では無理で今でも手に頼るしかなく、その安全性からもそれに代われるものがないそうです。また、精密機械に至ってはその正確さは一ミリメートル以下の世界で、機

械での採寸の後、微調整は手の指紋の感触でピタリ。「やはり最後は人間の手なんだ！」と感動してしまいました。唯一日本が守り抜いている金賞がこの部門なのを誇らしく思えたのは私だけではなかったと思います。

感じる・手

手は物を作り出すだけではありません。目の代わりに物を見ること（触れる）、耳の代わりにことばを聞くこと、読むこと（点字）、話すこと（手話）、そして子どもを温かく包み込みその温もりを感じる事、やはり、「手」は万物創生の神様が私たち人間に下さった宝物にちがいありません。

（工房さく主宰）

かしこい〝手〟

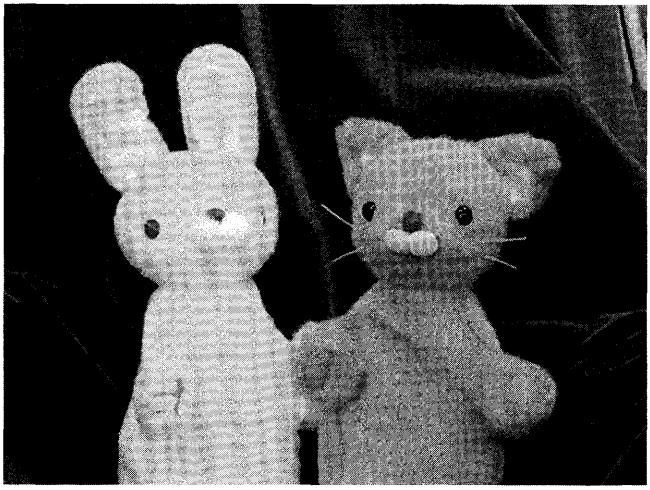
永野　むつみ

わたしは人形遣いです。

わたしは「片手遣い人形」をこよなく愛しています。ギニョールとかハンドパペット、手をすっぽりおおうために手袋式、または指人形ともいわ

れます。私は片手遣い人形とよんでいます。観るのは何でも好きですが、演じるのは片手遣いの人形、しかも衝立の後ろで、自分の姿が見えないようにして演じるのが好きです。

近頃では、人間の演劇に人形が登場したりその逆もあり、人形が必ずしも人の形をしているとも限りません。人形劇と人間劇、さらには影絵、ダンス、パフォーマンスなどなど、さかいめがあいまいで、そうしたジャンル分けそのものがナンセンスになってきました。いわゆる人形劇といわれるものでも、「出遣い」とよばれ、演者も人形とともに舞台に登場することが増えていて、私たちのようなスタイルはあまり多くないようです。たぶん、手を入れて遣うために人形の大きさや形に、制約が生まれてしまうからかもしれません。しかし、この「手を入れて遣う」というところが、私にとっては最大の魅力なのです。



▲“私の人形（マイ）”を作ろう

▲人形が動く

片手遣いの人形で遊ぶ

たいていの場合利き手を使います。人差し指を人形の頭に入れ、軽く薬指と中指を折り曲げ、残った小指と親指を、それぞれ人形の右手、左手に入れます。まっすぐ立ってみましょう。人形も演じる人もです。できれば脇をしめて、人形を自分の前に、できなければ、自分の身体の脇に立たせます。そして人形と自分とが同じ方向を向きます。これが基本のポーズです。

まず、身体を丸めてしゃがみこんでみましょう。それからいったん起こして、今度は伸びをしてみます。もちろん人形も演じる人も、です。そうするとたぶんあなたは気がつくでしょう、人形の動きと人間の動きがとてもよく似ていることに。人形の腹は私の手のひら、人形の背中は私の手の甲。腹を抱える感じや、反身になる感じが、

実際の自分の腹や背中の感じと似ています。演じるときに必要なイメージは、画像としてのそれではなく体に残る感覚の記憶でしょう。

人差し指の第一関節までを人形の頭に入れると、指の付け根のあたりまでが人形の首、その下から手首までが背骨、手首が腰。その下が脚で、曲げた肘のあたり上腕部が人形の足の裏だと思って動かしてみます。とりわけ腰は良く動きます。なんたって自分の手が入っているのですから安心。人形がどこを向いているのか、どんな体勢でいるのか、具合よくつかめます。

遊びから表現へ

誰かに人形と向き合ってもらって視線を合わせる、という稽古をすると、とたんに人形の目に力がこもり、生きているようにみえてきます。視線をあわせたまま、相手の人に少しずつ動いてもらって、いったん止まる。そしてちゃんと視線が合っているかどうか確認します。もっとあごをあげてとか、顔を右に振って、とか言ってもらいます。向こうから合わせてもらってはいけません。あくまでこちら側から合わせていくのです。

このとき外側から、目で人形の体勢を確かめるのではなく、人形の内側、つまり自分の手がどんな具合なのかを感じ取ることが大切です。かがみもこの時点では余り有効ではないと私は思っています。むしろ誰かに見てもらい、率直に言ってもらいながら自分の意思と、結果としての表現のずれに気がついていく方が意味があるでしょう。人形劇は自分の「こうしたつもり」が「そうは見えない」ということがよくある世界です。率直な第三者＝演出者の存在が不可欠です。その目がまさにかがみです。その目がゆがんでいたら……！演出者の存在は演技者を育てもし、ゆがめもしま

す。演出者の目は観客の目でなければなりません。

動きのイメージをつかむ

手を緊張させ、硬直させたり、緩めたりすると人形は、まるで人間がそうしたのと似たポーズをとります。互いに抱き合ったり、なでさすったり、ぶったり、ぶつかったり、背を向けたり、ものを持つことも得意です。しばらくすると、このスタイルの人形ならではの動きの面白さが見えてくることでしょう。同時に「操作」というより、「人形で」演じているのだということに気がつくかもしれません。

人形と演者との関係、距離の問題で言えば、人形の内側に入り込んでしまっているという点で、糸操りや、棒遣いの人形より、仮面に近いかもしれないと私は感じています。ただ、人形の腹は私

▲『二人のお話』――はじめて出会う人形劇――

の手のひら、背は甲、という置き換えが必要で、ここがわからないと簡単そうで難しい、と言う場合もあるようです。かつて、知的障害者との仕事の中で、「こんにちは」と、人形をはめたままで自分がお辞儀をしてしまうということがままありましたから。

糸操りには糸操りの、棒遣いには棒遣いの人形が描くのにふさわしい世界があるように、片手遣いの人形には、その形、動きの特徴を生かした描くべき世界があるような気がします。強いて言うなら講談ではなく落語。小説ではなく詩。短歌ではなく川柳。人形の身体にすっぽり演じる人の手が入っているという暖かさ、熱っぽさのようなものがそう思わせるのかもしれません。

かしこい手

さわる、たたく、手招きする……。そっと、強く、手かげんして……。人間が何かに働きかけるときに、身体の部位の中でよく使われる手。とりわけ利き手はかしこい。まさに利き手です。思い通りに動いてくれる。手ざわりでわかることはたくさんあります。まるで指のはらにはもうひとつの目がありそう。人差し指とはよく言ったものです。はっきり方向を示したい時は人差し指が便利です。表現的な手。この手が、片手遣いの人形にはすっぽり入っているのです。初めて人形劇をやるという人には、片手遣いの人形を、とまずはお勧めしたいのです。もしあなたが、あなたの手を信じ、ゆだねることができたら……！　ですが。

（人形劇団ひぽぽたあむ）

「手」をとおして、からだのなかに残る記憶

渡辺　満美

手あて

「おなかがいたいの」

「どこがいたい？　ここは？　ここは？」

おなかを触りながら子どものからだを引き寄せて、ひざの上に子どもをのせる。そのまま子どものからだと話をするように手をあて、手から伝わってくる子どもの気持ちとむきあう。子どもの顔を見ずに手をあてることもある。本当に痛いとき、痛いところを触るとからだが自然と動く。顔をみて判断するのではなくからだの動きから感じることからはじめる。何も話していないが、ひざの上に乗っている子どものからだの身のおきかたで今の気持ちも伝わってくる。そして、顔を見な

がらおなかに手をあて子どもの動き・表情を感じとり、ことばをひきだしながら聞いてみる。幼稚園の養護教諭となり、子どもの、動き・身のおき方・痛さの度合いをからだで感じとろうとすることに集中する自分がいるのを感じる。自分の状況を伝えられない子どもたちに、どんな処置をしていくかは子どもの動きから判断するしかなかった。

保育中、保健室にくる子どもの中には本当に（器質的に）おなかの痛い子どもは少ない。ただ、本当に痛いとはどういうことなのか…。「どこがいたいの」と手をあてて聞いていると膝の上に乗っている子どもの身のおき方から器質的なものからくるのではないが、痛さを感じている子どもを私は感じる。「本当に痛いの。〝だいじょうぶ〟なんて簡単に言わないで…」という声がからだから聞こえてくる気がしてしまう。そんな時、そのまま子どものからだと向き合うことを続ける。そして、手をあてたまま、痛い理由を聞いたり聞かなかったりと、からだから伝わってくる子どもの気持ちにあわせて私の対応は変わる。そのうち、硬くなっている子どものからだが、膝の上でふとした瞬間やわらかくなっていくのを感じ、もう言葉をかけても大丈夫かもしれないと感じる瞬間がある。手をあてている時間は、一分のときもあれば十分のときもあり、その場では足りないことも。この時間は、相手の必要とするものと私が感じることのできたものが重なるために必要な時間なのかもしれない……。

手あてということばは、「相手を思いやる温かい心のこもった〈手〉を患部にあて、その手の温もりで苦痛を和らげる」ということから発したことばと言われる……。

私はその手あての「手」を幼いときに感じたことがある。その手を感じることができたから、手あてでは相手に気持ちを伝えることもできる「手」をもっていることを忘れず関わっていかなければいけないと思うのです。

記憶

「手」といえば、父親・祖父の大きくて、ごつごつした、仕事のなかで使ってきた手を思いだすとあるひとはいった。その手とともにある記憶に私は思いをめぐらせた。私にとっての「手」は……。

幼いころ二度の入院をした。二度とも一か月くらいの入院。しかし、私はお世話になった病院の方たちの顔をまったく思い出せない。ただ、処置をしているときの手の動き、私の手を握ってくれたときのその人の手の温かさ、からだを支えてくれた手によって安心していく感じ。手の動きと温かさだけが取り出されたように私のからだで感じた感覚として記憶に残っている。

手術直後、はっきりした記憶ではないが不安で母の手を探り、ずっと握ってもらっていたことを憶えている。握られた手を離されたとき、周りの人たちがいなくなるだけでなく自分自身の存在もなくなってしまいそうでこわかった。そして、私は母の手を夢中で探した記憶がからだの感覚として残った。母は私の手をつよい力で握っていたわけでもなく、不安に引き戻されてしまいそうなよわい握り方でもなく握って

くれていた。しかし、手を握っていてもらうことで、不安でいっぱいの私のからだに手の温かさがしみわたっていくような気がしたのを憶えている。『不安』だった記憶とともに手から伝わる『手の温かさ』が今でも私のからだの感覚に残っている。私のなかで『不安』と『手の温かさ』は一緒の記憶になっていた。

不思議なことは、この記憶が昔からの記憶ではないこと。ここ数年の間で思い出されてきた記憶。幼いときの体験としてからだの中に残っている感覚の記憶がふとした瞬間に、同じような場面を体験した瞬間などに）思いだされ、その記憶とともにそのときの感情がだんだんと思い出されていくのを感じている。私は早く家に戻りたいという思いだけで病院での生活を過ごしていた。私の手を握ってくれた母の思い、担当だった方たちの私にかけてくれた思いを感じることはなかった。

しかし、入院中の生活を振り返ると、不安を感じたことも嫌だったこともあったはずなのに「入院中の生活」と「不安」が今の私は結びつかない。それは、私を支えてくれた人たちの思いがあったからだと思う。きっとその『温かい手』をさしのべてくれた人たちの存在がなければ、今の私には嫌な記憶と不安だけが残っていたのかもしれない。私にとっての「手」は、とても温かく不安を取り除いてくれる存在で、手を通してそれぞれの思いを伝え合うことのできるものであった。私にはこの記憶があるから、伝えることのできる思いも必ずあるものだと信じられる。そして「手あて」を行うときの私は、この「手」の記憶をぬきには存在していないと思う。

「温かい手」を持った人たちの手は本当に温かかったのか…？

実際の母の手は、今も昔もつめたい。私が手を温かいと感じていたのは、そこに私への思いがあったからだろう。体温とは関係なく気持ちの温かさがあったのだろう。私は体温の温かさでなく、『気持ちの温かさをもっている手』と出会えたから、手が不安を取り除いてくれるものだと思うのかもしれない。からだで感じたことは気持ちとも結びついていくのだろう。そして気持ちをからだで感じることもできるのだろう。からだで感じた記憶はずっと残っている。その記憶がはっきりとしたものとなっていくのは、自分の気持ちをことばで表現することができるようになったときかもしれない。

S子の「手」

おかえりの時間。S子が「せんせい行かないで、一緒にいて」と私の手をとり、必死な顔で訴えた。〝ギュウ〟と握られた手から行かないでという必死な思いが伝わってきた。幼稚園で生活しはじめて約二か月。ここ二、三日保健室に顔を出していたS子の訴えだった。おかえりの時間、保健室でけがの手当てを待っている子どもがいるかもしれないと思いながらもその子と一緒にいることを決めた。そして、ならんだ椅子の端のところに行き、私と手をつないだままでも彼女が座れるように「ここでいいかしら？」と聞くと「うん」とこたえた。S子は私の手をつかむ力を緩めなかった。私はS子の座る左側に腰をおとした。少しだけ時間がたったとき、私はS子に「ちょっとだけ、待っていてくれる」と聞くと、不安そうな顔を見せながらも「すぐね」と言って手を離した。

私は保健室に帰ることを一度はあきらめながらもやはり気になり、S子に少し付き合ったところ

でS子はもう大丈夫だろうと思ったのだ。しかし手を離した瞬間、S子の手の離し方からその判断が間違っていたことに気づかされた。私はその場にS子といただけ（付き合っただけ）だったのだ。S子がその場で不安を抱いたまま過ごすことのないようにということは考えていなかったのだ。手を離したときのS子の気持ちを感じ、すぐにS子の所へ戻ろうと思いながらも保健室へ向かってしまった。

もしかしたら、S子は待っていないかもしれない……。

S子のいる部屋に戻りS子の方を見ると、H先生が、後から入ってきたF子のためにS子の左側に椅子を並べていた。その光景を見て、一瞬、そばに行くことを迷ったがS子は待っていた。まだ、S子と関われることに半分ホッとして、まだ遅くないと思えた。S子は必死な顔で手を伸ばしてきた。その手をとり、私はF子の横で腰をおろし、F子の膝のあたりでS子と手をつないでいた。Y先生がみんなの前で本を読み始めた。手をつなぎながら、さっきは感じることのできなかったS子の落ち着く感じを手から感じることができた。本も楽しくなってきた頃、隣のF子に「S子の手を握ってあげてくれる？」と小声でいうとF子は何も聞かず、そっと手を出しS子の手を握った。最初こそS子は私のほうを見たものの、それからまた本の世界へと入っていった。私は、本が終わるまでその場にいた。F子は本を読んでいる間S子の手をずっと握っていてくれていた。私は

その場を離れた。

おかえりにならんでいるS子と廊下でまた出会った。手を振っていた。しかし、すぐに手を握ってくることはなかった。少し一緒に歩いたあと、手を握ってきた。まだ不安だったのだろうか…と思った。しかし、S子の手は私の手をやさしく掴んでいた。S子の後ろにF子がならんでいた。「F子と手をつないで帰ろうか?」と言うとS子はF子の手をそっととって手をつなぐ。そして、つながれたふたりの手がリズムをとるように振られはじめた。その振動で私とつながれている手も小さく動いた。二人は顔を見合わせていた。三人で手をつないでいるはずなのに、そこに私はいなかったように感じた。二人の世界が出来ていたように思う。そっと私は手を離しS子と離れた。S子が私を振り返ることはなかった。

S子にとって私の手は不安をとりのぞく「手」となれただろうか…。

この小さな出会いは二人をつなぐきっかけとなり、どこかで二人が出会ったときに温かい気持ちを思い出してくれるものであればと思う。また、この瞬間だけだとしてもS子にとって友だちを感じることのできた関わりであれば、それだけでS子には大きな関わりだったとも思う。

私の手ではなく、「F子の手」が不安をとりのぞく手となっていてくれたら、これからのS子の生活はより安定したものとなっていくのではないだろうか。私はS子の生活がより安定したものとなっていく「手」としての関わりをしていきたいと思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

雨の一日をある保育園で過ごしました。

私が四歳児の部屋に入るともう遊び始めていて、Aは床の上で電車を動かしていました。それを見たT先生が水色の模造紙を二枚つなぎ黒いペンで素早く線路と駅を描くと、早速Aたちがその上を走らせます。少し離れた製作テーブルにいたB先生が来て、赤い屋根の家をひょいと駅の近くに置いた途端、駅の周りがぐっと立体的になり、私は牛乳パックに色紙を貼っただけでこんなにも素敵な家に変身するのかと感心しました。Kは自分も家がほしくなり、製作テーブルへ行きました。

「何か楽しそう」と電車を持った子たちが水色の紙を取り囲みました。そこへKが戻り、水色の家を線路の横に置くと、今度はその周りが魅力的になり、それを見たAは飛んで行って「トンネル作って」とB先生に頼みました。さっきから積み木で作ったトンネルが電車をくぐらせる度に崩れていたのです。その頃には、製作テーブルと線路を行き来して遊ぶ子が増え、「次は何ができるのだろう」とたくさんの子がテーブルを取り囲んでいました。

Aが、牛乳パックの天地を切り取った水色のトンネルを路線の上に置くと、いくつもの電車がそこをくぐっていきました。

こうして、二つの場を行き来して遊びが続き、あっという間に小一時間が過ぎました。（仲）

幼児の教育

第一〇二巻　第十号
（二〇〇三年十月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十五年十月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108—8620 東京都港区三田五—二二—一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113—8611 東京都文京区本駒込六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。